

## 小学校児童の住空間に対する認識と志向

### (第2報) 児童の家庭環境に対する認知の実態とその影響要因

中 島 喜代子

#### Primal School Children's Recognition and Directional Intention of Dwelling House and Home Life (Part 2)

#### *Primal School Children's Recognition of Circumstances in Their Home, and the Factors Which Have Influence upon It*

Kiyoko NAKAJIMA

### 1. 緒 言

前報(第1報)では、住宅内にある生活用品の配置・収納場所に対する認知の実態と構造をとらえることにより、児童の住空間に対する認識について検討した。本報では、ひき続き、児童をとりまく家庭環境に対して、児童本人がそれをどの程度認知しているのかをとらえ、その認知の実態と構造および認知発達状況と認知発達に関わる形成要因との関連について明確にすることを目的としている。

著者の一連の住居観に関する研究<sup>1)</sup>の過程で、居住者の住居観は、その人が育った家庭環境によって受ける影響は無視できないものであることを実感した。そのことより、児童の住空間認識の発達段階において、家庭環境に対する認知がどのように行なわれているのかを把握することは、重要な意味をもつと考えられる。

本報における分析の手順は、まず、各家庭環境項目間の認知度の差異を検討し、認知がどの側面から進行するかをとらえ、次に、各家庭環境項目の認知度について、これを性別、学年別に検討する。また、家庭環境に対する認知の構造をとらえるため、因子分析を行なってこれを検討する。さらに、各家庭環境に対する認知の発展に影響を与える要因についても検討を加える。

### 2. 研究の方法

1983年7月に、四日市市の小学校児童3年～6年生を対象にアンケート調査を実施した。調査対象の概要は、前報に示したとおりであるが、本報では分析の対象を3年～6年生の530件としている。

調査に用いた家庭環境に関する項目は、表1に示す26項目である。これを、《対象の意味内容》から、住居観型と対応づけて〈しきたり〉〈みせびらかし〉〈自律〉〈マイホーム主義〉〈社会性重視〉〈あたらしがり〉〈ねぐら〉に分類し<sup>2)</sup>、《対象の区分》として〈空間の実態〉、〈空間の使い方〉、直接空間と関連をもたない〈生活の実態〉、抽象的な両親の志向や姿勢を示す〈両親の考え方〉に分類した。さらに、個別の部分的空間から住宅全体、あるいは子供の生活から親の生活、日常的空間や生活から非日常的空間や生活(接客室、行事・儀式など)などの空間と生活の広がり(の側面)として《対象の広がり》を分類した。

上記各家庭環境に対して、対象者の家庭が該当するかどうかについて、「はい」「いいえ」「わからない」のカテゴリ分類で調査した。そのうち、「はい」もしくは「いいえ」のいずれかに回答した場合、その家庭環境に対して認知しているものとみなし、逆に「わからない」と回答した場合、非認知のものとみなした。以下の分析は、この「認知」と「非認知」を軸に行なう。

表 1 調査項目と分類

家 庭 環 境 項 目	対象の意味内容	対 象 の 区 分	対 象 の 広 が り
1 おとうさんやおかさんは、あなたやあなたの兄弟に家や土地をうけついでくれるように日ごろからいっていますか。	しきたり	両親の考え方	家、土地
2 あなたの家は、家相や占いをわりと気にしますか。	〃	〃	家相、占い
3 あなたの家では、おふろに入る順じよや食事のときのもりつけ順がはっきり決まっていますか。	〃	空間の使い方	風呂、台所
4 あなたやあなたの兄弟は、お客さんをもてなすへやをかってに使うとおこられますか。	〃	〃	接客室
5 あなたの両親は「男は台所に入るべきではない」といっていますか。	〃	〃	台 所
6 つづきべや（しょうじやふすまをとりはずすと2つのへやが1つになる）がありますか。	〃	空間の実態	つづきべや
7 あなたやあなたの家族がくつろいだり、ねたりするへやよりもお客さんをもてなすへやのほうがりっぱですか。	みせびらかし	〃	接客室
8 結こん式や葬式、おまつりなどをはでにおこなう家ですか。	〃	生活の実態	行事、儀式
9 おとうさんやおかさんも自分のしごとや趣味をもっていて熱心にしていますか。	自 律	〃	両親の生活
10 あなたやあなたの兄弟は、両親のへやにかってに入るとおこられますか。	〃	空間の使い方	両親の部屋
11 あなたの家では大事なことは家族で話しあって決めますか。	マイホーム主義	生活の実態	家 族
12 あなたの家ではお客さんを居間におとしてみんなでもてなしますか。	〃	空間の使い方	接 客
13 あなたの両親はPTA、子ども会、町内会などの活動をすすんでしていますか。	社会性重視	生活の実態	両親の生活
14 あなたの家では新しい電気製品や道具が発売されるとわりとよく買いますか。	あたらしがり	〃	生活機器
15 あなたの両親は「家はねることができればよい」といっていますか。	ねぐら	両親の考え方	住宅全体
16 あなたの家はどのへやも自由に出入りできますか。		空間の使い方	〃
17 何もつかっていないへやがたくさんありますか。		〃	〃
18 あなたの家はひっこしをよくしましたか。		生活の実態	転 居
19 おじいちゃん、おばあちゃんといっしょに住んでいますか。または住んでいましたか。		〃	祖父母
20 家の外から見られないように木をうえたり、へいをつくったりしていますか。		空間の実態	家の周囲
21 あなたの家はお客さんがよく来ますか。		生活の実態	客
22 あなたの両親は家の中がきちんと整理整頓されていないと気がすまないほうですか。		両親の考え方	住宅全体
23 あなたの両親はまわりの家に気をつかい「近所のめいわくなることはしてはいけない」ということがよくありますか。		生活の実態	近 隣
24 あなたの両親は「子どもべやをきれいにしなさい、かたづけなさい」とうるさくいますか。		〃	子どもべや
25 あなたの両親はあなたにおてつだいをさせますか。		〃	子どもの生活
26 あなたは家の中よりも外でよくあそびますか。		〃	子どもの生活

### 3. 調査結果および考察

#### 1) 家庭環境項目別にみた児童の家庭環境に対する 認知の傾向と家庭環境の実態

対象全体と男女別に、各家庭環境項目について「はい」もしくは「いいえ」と答えた割合（以後、「認知

率」と記す）を図1に示す。

全項目ともに、ほぼ7割程度以上の「認知率」を示している。そのうち、「認知率」が80%未満の項目は、＜対象の広がり＞が「⑦接客室優先」「⑧冠婚葬祭盛大」「⑫居間接客」「⑳多来客」（○内の数字は図1中の項目番号を示す）など接客室あるいは接客行

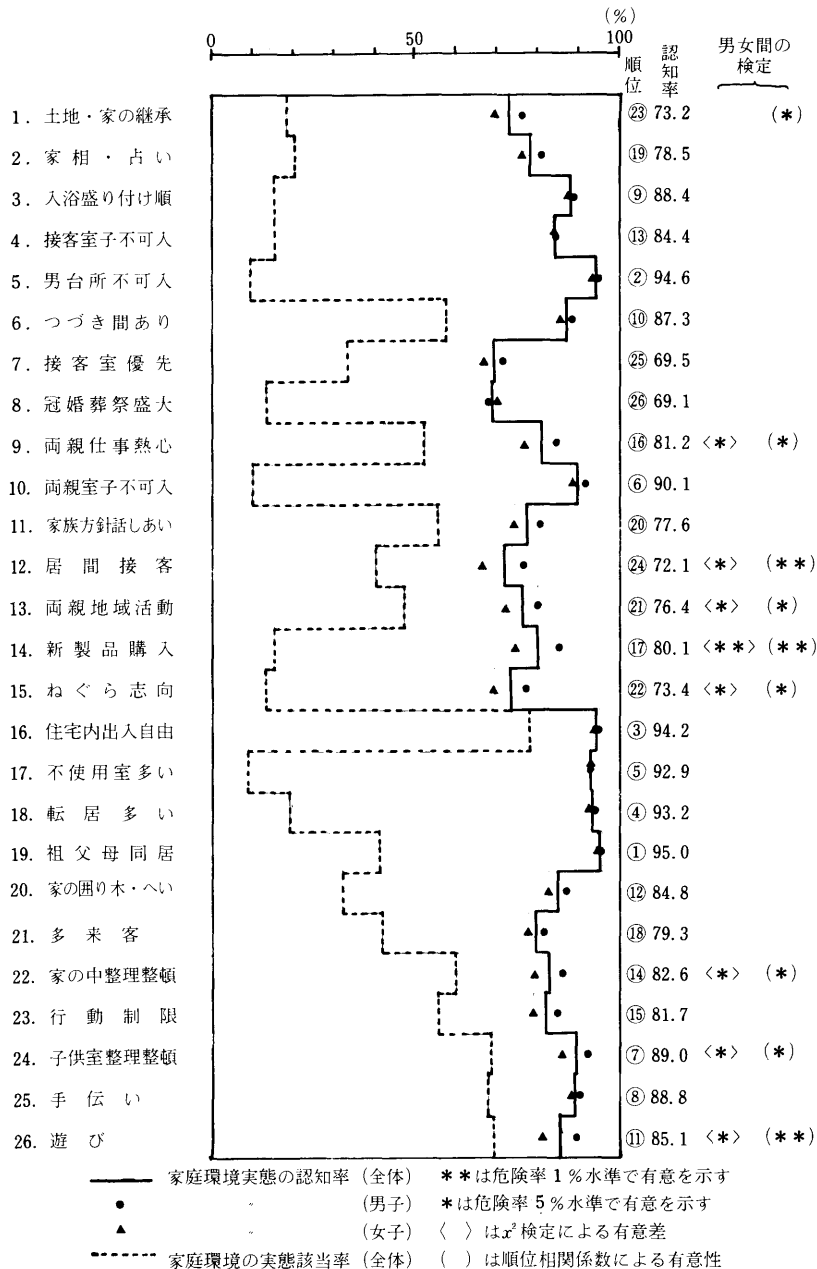


図1 家庭環境の実態に対する認知率 (対象全体)

為に関する非日常的空間あるいは非日常的の生活に関する項目と、「⑫両親地域活動」「⑪家族方針話し合い」の両親の生活や家族全体の生活に関する項目であり、また＜対象の区分＞では「①土地・家の継承」「②家相・占い」「⑮ねぐら志向」などの＜両親の考え方＞の項目である。すなわち、非日常的空間や生活あるいは両親や家族全体の生活についての認知はやや遅れており、また抽象的概念を示す＜両親の考え方＞の側面でも同様に認知が遅れていることが明らかにになった。

逆に、＜対象の区分＞が「⑤男台所不可入」「⑩両親寝室子不可入」「⑬部屋出入自由」「⑰不使用室多い」「⑱転居多い」「⑲祖父母同居」などの＜空間の使い方＞や＜生活実態＞に関する項目については「認知率」が90%を越えており、認知が容易であるといえる。

次に、対象全体について男女別に、家庭環境に対する「認知率」の差異をみると、26項目中22項目(84.6%)は、男子の「認知率」の方が高くなっている。そこで、性別と「認知」「非認知」との $\chi^2$ 検定において、危険率5%水準までの有意差のある項目をみると、「⑨両親仕事熱心」「⑬両親地域活動」の両親の生活に関する項目、「⑫居間接客」の接客に関する項目、「⑭新製品購入」の生活全体にわたる実態に関する項目、「②子供部屋の整理・整頓」「⑥子供の遊び」などの子供の生活に関する項目があり、＜対象の広がり＞が子供の生活から両親や接客など全体にわたってみられる。また、＜対象の区分＞でも「⑮ねぐら志向」「②家の中整理・整頓」などの＜両親の考え方＞および＜生活の実態＞や＜空間の使い方＞にわたっている。これらの男女による有意差がみられる項目はすべて男子の「認知率」の方が高くなっており、家庭環境の実態に対する認識は男子の方が進んでいるといえよう。この傾向は、小・中・高校生段階では女子の注意意識の方が着実で、信頼性が高いとされている既研究<sup>9)</sup>とは逆の結果となっている。

児童をとりまく家庭環境の実態をみると、各家庭環境について該当すると答えた率が低い項目は、「⑩両親寝室子不可入」「④接客室子不可入」「⑤男台所不可入」など住空間の使用を制限し、隔離する項目にみられ、逆に「⑬部屋出入自由」の率は全項目中一番高くなっている。また、「⑥つづき間あり」を除く＜しきたり＞的環境や「⑮ねぐら志向」「⑧冠婚葬祭盛大」「⑭新製品購入」などの＜ねぐら＞＜みせびらかし＞＜あたらしがり＞的環境と「⑰不使用室多い」の非合理的空間使用などの実態も少ない(図1)。

## 2) 学年別による児童の家庭環境に対する認知

児童の年齢と家庭環境に対する認知の進展との関係をとらえるため、学年別に家庭環境に対する「認知率」を算出し、図2に示す。

学年と「認知」「非認知」との順位相関係数に、危険率5%水準以上の有意性を示す項目は、＜対象の意味内容＞が「①土地・家の継承」「②家相・占い」「③入浴・盛りつけ順」「⑤男台所不可入」「⑥つづき間あり」などの＜しきたり＞的環境や「⑫居間接客」の＜マイホーム主義＞的環境において、学年が進むほど家庭環境の実態に対する認知は進んでいる。また、＜対象の区分＞では、「①土地・家の継承」「②家相・占い」の＜両親の考え方＞および「③入浴・盛りつけ順」「⑤男台所不可入」「⑫居間接客」「⑩両親寝室子不可入」「⑬部屋の出入自由」などの＜空間の使い方＞においても学年が上昇すると家庭環境の実態に対する認知が進むという関連をもっている。

## 3) 児童の家庭環境に対する認知の構造

児童の家庭環境に対する認知の構造をとらえるため、各家庭環境項目について「認知」「非認知」のカテゴリー分類で、因子分析を行なった<sup>4)</sup>。その結果を表2に示す。

因子分析を行なった結果、第6因子までを抽出したが、第1因子の寄与率が65%を占め、第2因子までで80%近くを占めている。第1因子は、住空間の制限的使い方の諸項目を除いた＜対象の意味内容＞が＜しきたり＞＜みせびらかし＞＜自律＞＜マイホーム主義＞的環境などの諸項目が0.40以上の因子負荷量を示している。また、＜対象の広がり＞では、接客室や接客行為、親の生活や家族全体の生活、＜対象の区分＞では＜両親の考え方＞などが0.40以上の因子負荷量を示しており、この因子は児童本人との関連の薄い事柄に関する因子である。

第2因子は、「②家の中整理・整頓」「④子供部屋整理・整頓」などの住宅の整理・整頓に関する項目や「⑬両親地域活動」「⑫両親近隣に気を使う」などの居住地域に関する項目が因子負荷量0.40以上を示しており、この因子は住宅の整理・整頓と居住地域に関する因子と考えられる。

第3因子は、「⑩両親寝室子不可入」「④接客室子不可入」などの空間の使い方を規制する項目と「⑱祖父母同居」という住空間の使い方をより秩序化する要因になると考えられる項目が因子負荷量0.40以上を示しており、この因子は空間の使い方の秩序化に関する因子と考えられる。

# 小学校児童の住空間に対する認識と志向

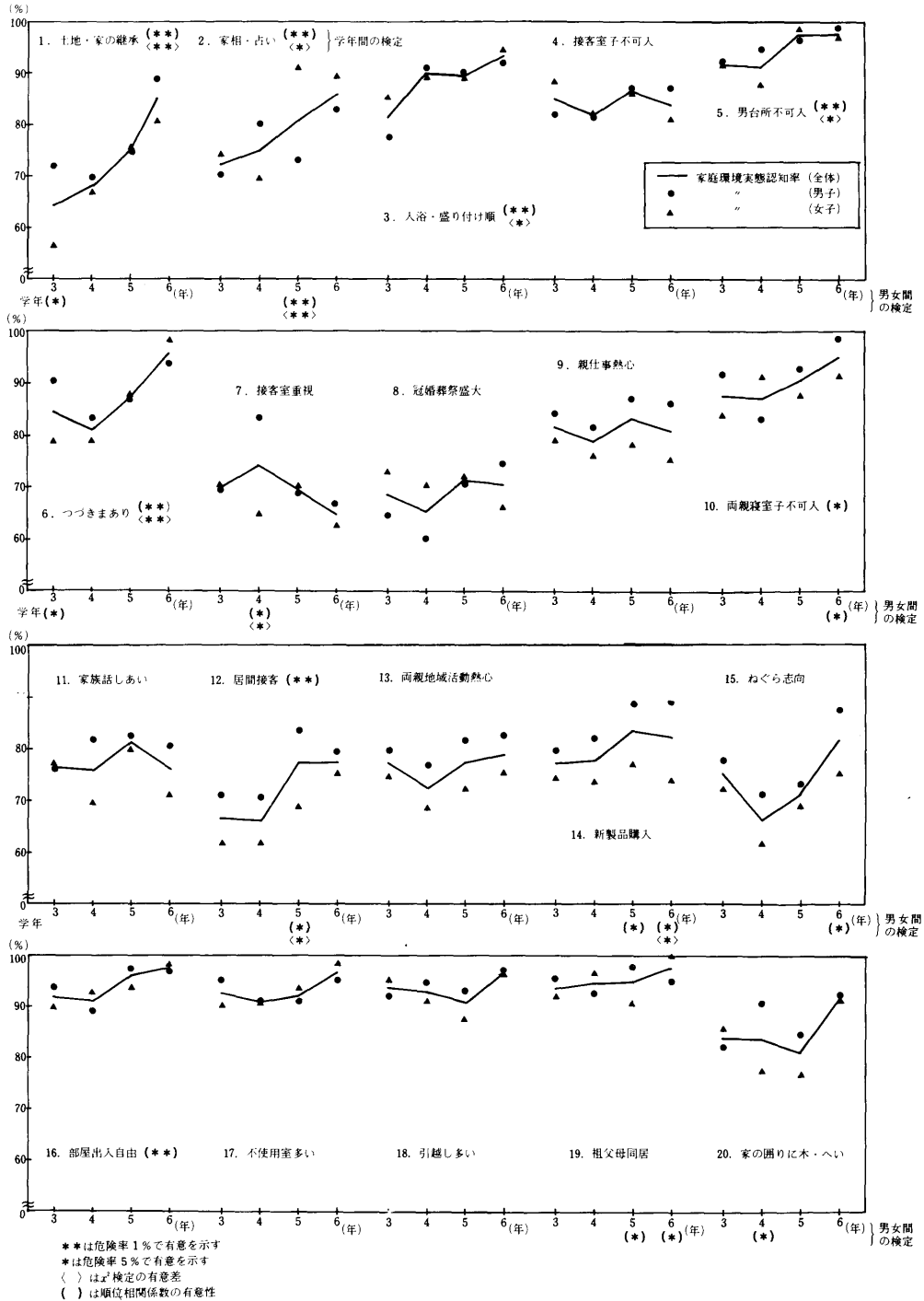


図2 学年別家庭環境の実態に対する認知率

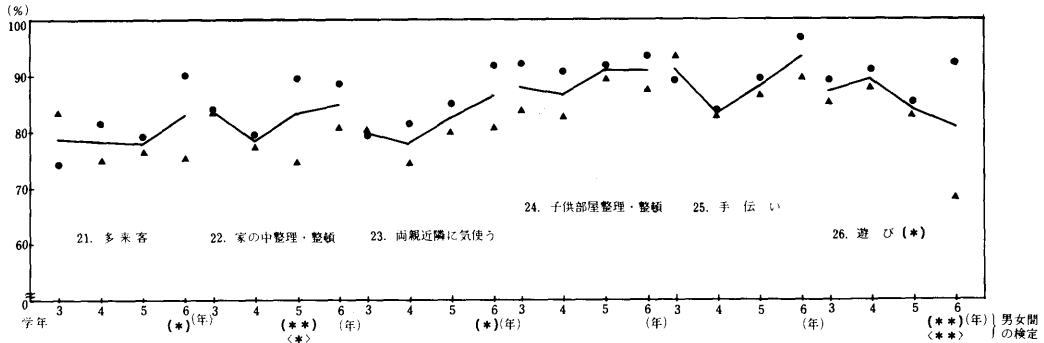


図2 (続)

第4因子は、「⑰不使用室多い」という空間の実態に関する項目のみが0.40以上の因子負荷量を示すが、「⑭新製品購入」「⑱転居多い」「⑲祖父母同居」「⑳子供の遊び」などの生活の実態に関する項目も0.30以上の因子負荷量をもっている。このことから、この因子は空間および生活の実態に関する因子と考えられる。

第5因子は、「⑤男台所不可入」「⑯部屋出入自由」の住空間の使い方を制限する2項目が0.40以上の因子負荷量をもっている。これは第3因子とよく似ているが、この因子の場合性別による空間の使い方の差別の側面がとらえられており、第3因子の空間の秩序化因子とは区分できよう。よって、この因子は空間の使い方の差別化と自由化に関する因子と考えられる。

第6因子は、「⑮ねぐら志向」の両親の住空間に対する考え方に関する項目のみが0.40以上の因子負荷量を示し、両親の住空間に対する考え方のうち、住空間に対する無関心さの側面が独自の因子を形成している。

#### 4) 児童の家庭環境に対する認知に影響をおよぼす要因

児童をとりまく家庭環境の実態に対する児童の認知が、どのような要因によって影響を受けているかについて検討する。

影響要因として、児童本人の条件(学年、性別の2要因)、家族条件(家族人数、本人の続柄、兄弟数、家族型の4要因)、社会的階層条件(父親の学歴、母親の学歴の2要因)、住空間条件(住宅形式、住宅の部屋数、現住宅への入居年度、所有関係の4要因)、児童の住空間に対する興味・関心(友達、両親、マ

スコミなどを通じた住空間の情報接触からみた住空間に対する興味・関心の7要因)の5条件、19要因をとりあげる。

家庭環境項目を、《対象の意味内容》による分類より「しきたり的環境」項目(①～⑥の6項目)、「みせびらかし的環境」項目(⑦⑧の2項目)、「自律的環境」項目(⑨⑩の2項目)、「マイホーム主義的環境」項目(⑪⑫の2項目)、《対象の区分》の分類より「住空間の実態」(⑬⑭⑮の3項目)、「空間の使い方」(⑯⑰⑱⑲⑳の7項目)、「両親の住空間に対する考え」(①②③④の4項目)、《対象の広がり》分類より「両親の生活」(⑤⑥の2項目)の8分類をとりあげ(一部同一項目が多側面に重複して分類されている場合もある)、さらに家庭環境項目全体も加え(⑳項目は子供の遊びに関する項目で、子供自身の生活だけに限定したものであるため除いた)、それぞれの分類について「認知」されている項目数を加算し、各要因のカテゴリー別にその平均値を算出した(各分類の平均値算出において、1項目でも無回答がある場合は、それぞれの対象から除いた)。その結果を、平均値の差の検定、 $\chi^2$ 検定、順位相関係数の有意性ととも表3～表5に示し、家庭環境全項目(以後、「全家庭環境」と記す)については、影響要因別の家庭環境認知個数の累積度数分布を、図3～7に示す。

まず、＜児童本人の条件＞要因と、児童の家庭環境実態の認知個数との関連を検討する。「学年」要因では、「しきたり的環境」「空間の使い方」「両親の住空間に対する考え」と「全家庭環境」について有意差がみられ、これらは学年が進むほど認知が進展している。「性別」要因では、「自律的環境」「マイホーム主義的環境」「空間の使い方」「両親の生活」と「全

表2 家庭環境認知の因子分析

変数	FACTOR 1	FACTOR 2	FACTOR 3	FACTOR 4	FACTOR 5	FACTOR 6
1 土地・家の継承	0.47335	0.09423	0.00343	0.13064	0.16198	0.17027
2 家相・占い	0.56919	0.07140	0.04304	-0.10707	0.05296	0.16178
3 入浴・盛り付け順	0.41777	0.07063	0.19436	0.22812	0.06904	-0.12104
4 接客室子不可入	0.32471	0.10822	0.45318	0.06061	0.22906	-0.06914
5 男台所不可入	0.15891	0.10858	0.20239	0.01004	0.59835	0.12342
6 つづき間あり	0.25153	0.09105	0.30556	0.20007	0.29056	0.16804
7 接客室優先	0.46519	0.08667	0.12214	0.08456	0.10371	0.04156
8 冠婚葬祭盛大	0.41450	0.27872	0.19389	0.18973	-0.00260	0.02729
9 両親仕事熱心	0.40404	0.20668	0.20691	0.21674	0.03363	0.01446
10 両親室子不可入	0.13041	0.13625	0.70198	0.00216	0.30861	0.20094
11 家族方針話しあい	0.49985	0.26041	0.14784	0.21498	0.06196	0.08020
12 居間接客	0.43611	0.31952	0.14598	0.09761	0.16322	0.12802
13 両親地域活動	0.26214	0.43315	0.25106	0.07970	-0.09428	0.22941
14 新製品購入	0.27123	0.31652	0.12367	0.36911	0.02479	0.20167
15 ねぐら志向	0.27648	0.23890	0.06369	0.21991	0.11173	0.54436
16 住宅内出入自由	0.06767	0.20126	0.12336	0.21854	0.53490	-0.03178
17 不使用室多い	0.10561	0.09320	0.20658	0.42922	0.08544	0.14985
18 転居多い	0.18058	0.05941	0.14124	0.32414	0.23631	-0.00268
19 祖父母同居	0.10613	0.13428	0.53348	0.34696	0.06405	-0.05577
20 家の囲り木・へい	0.21394	0.30152	0.15697	0.11481	0.15525	0.20004
21 多来客	0.37500	0.25147	-0.04699	0.23981	0.08632	0.23792
22 家の中整理・整頓	0.16466	0.62910	0.11520	0.11862	0.07869	0.01796
23 行動制限	0.20385	0.52826	0.18697	0.11051	0.17477	0.08529
24 子供室整理・整頓	0.06054	0.48376	-0.01029	0.18578	0.20247	0.04095
25 手伝い	0.16600	0.29964	-0.01603	0.29193	0.07034	0.08764
26 遊び	0.04034	0.21633	0.01014	0.34788	0.05645	0.03564
寄与率 (%)	65.0	11.1	8.5	6.0	5.2	4.2

注 □ は、因子負荷量0.40以上のもの

□ は、因子負荷量0.40未満であるが、各変数の因子負荷量が全軸中で一番大きいもの

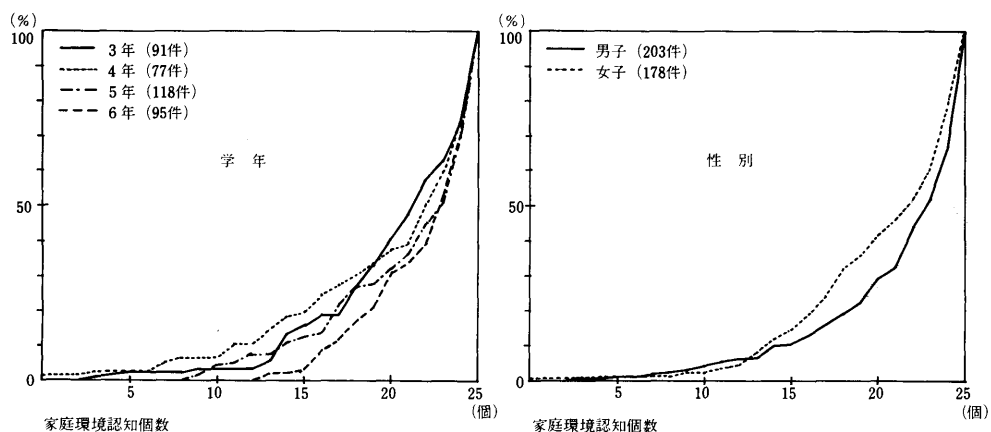


図3 児童本人の条件要因別家庭環境認知個数の累積度数分布

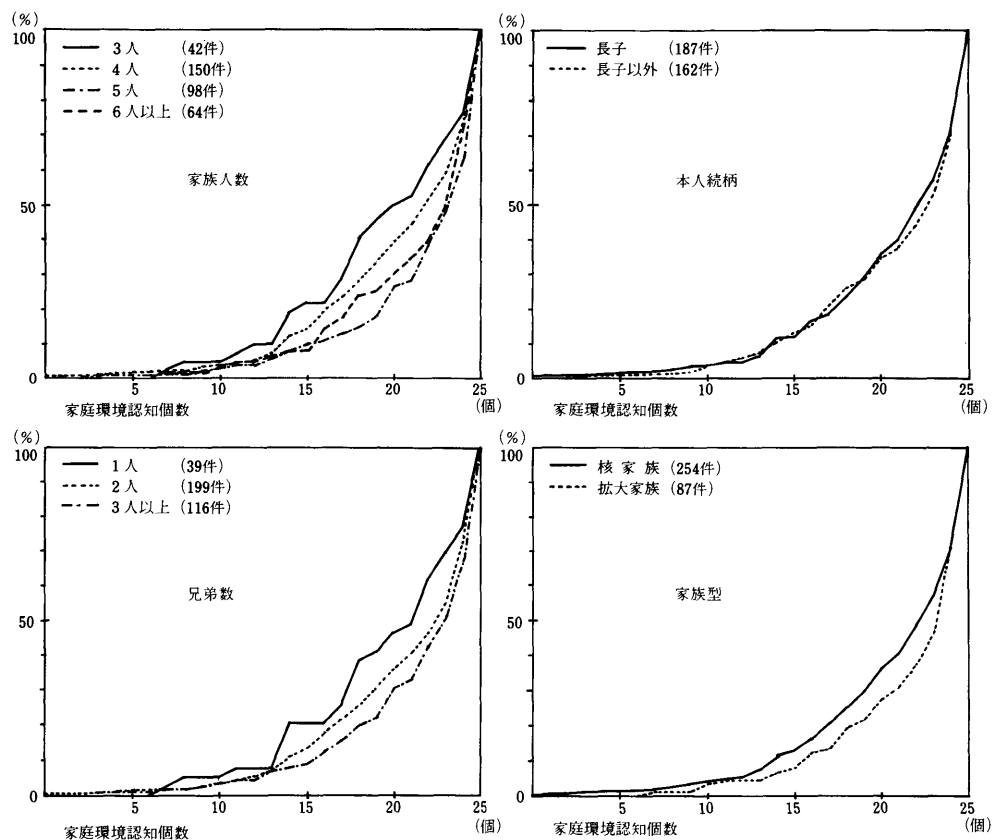


図4 家族条件要因別家庭環境認知個数の累積度数分布



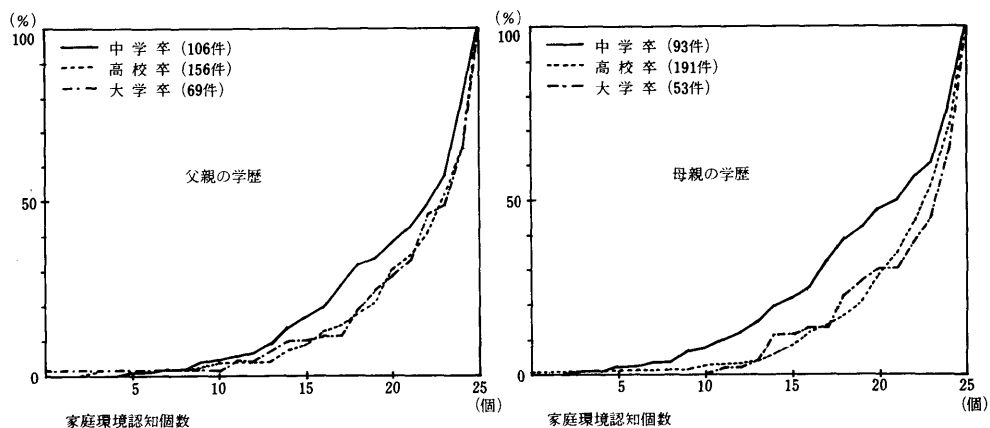


図 5. 社会的階層条件要因別家庭環境認知個数の累積度数分布

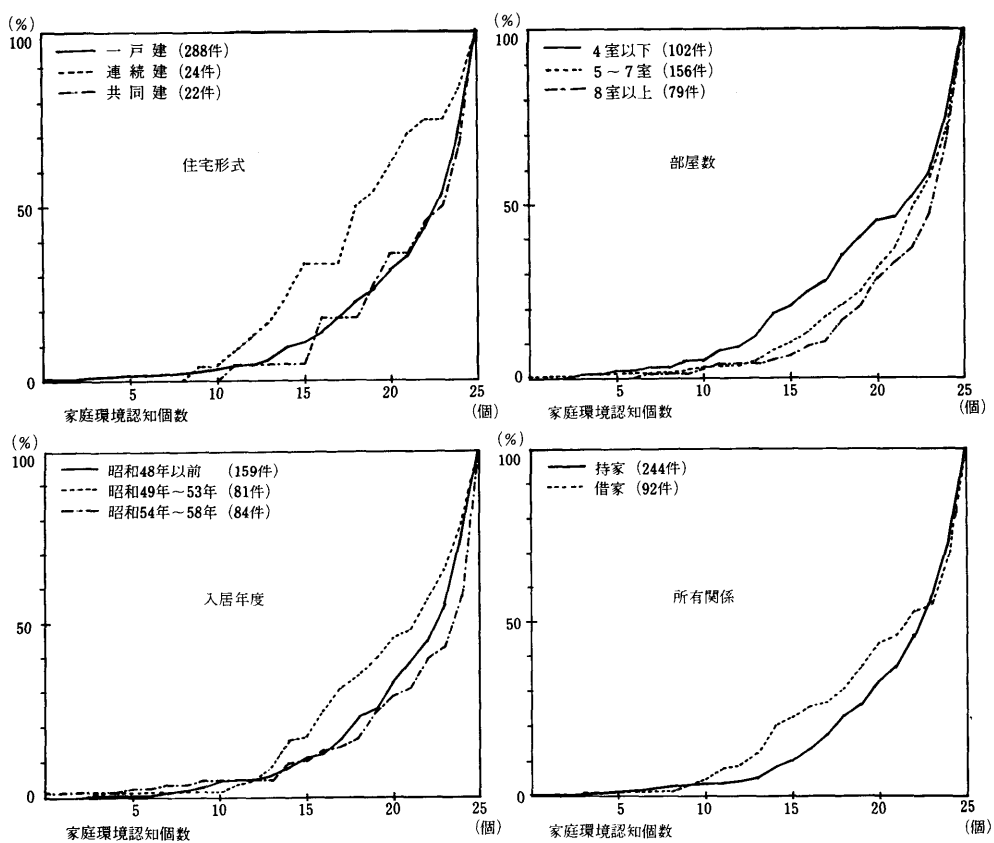


図 6. 住空間条件要因別家庭環境認知個数の累積度数分布

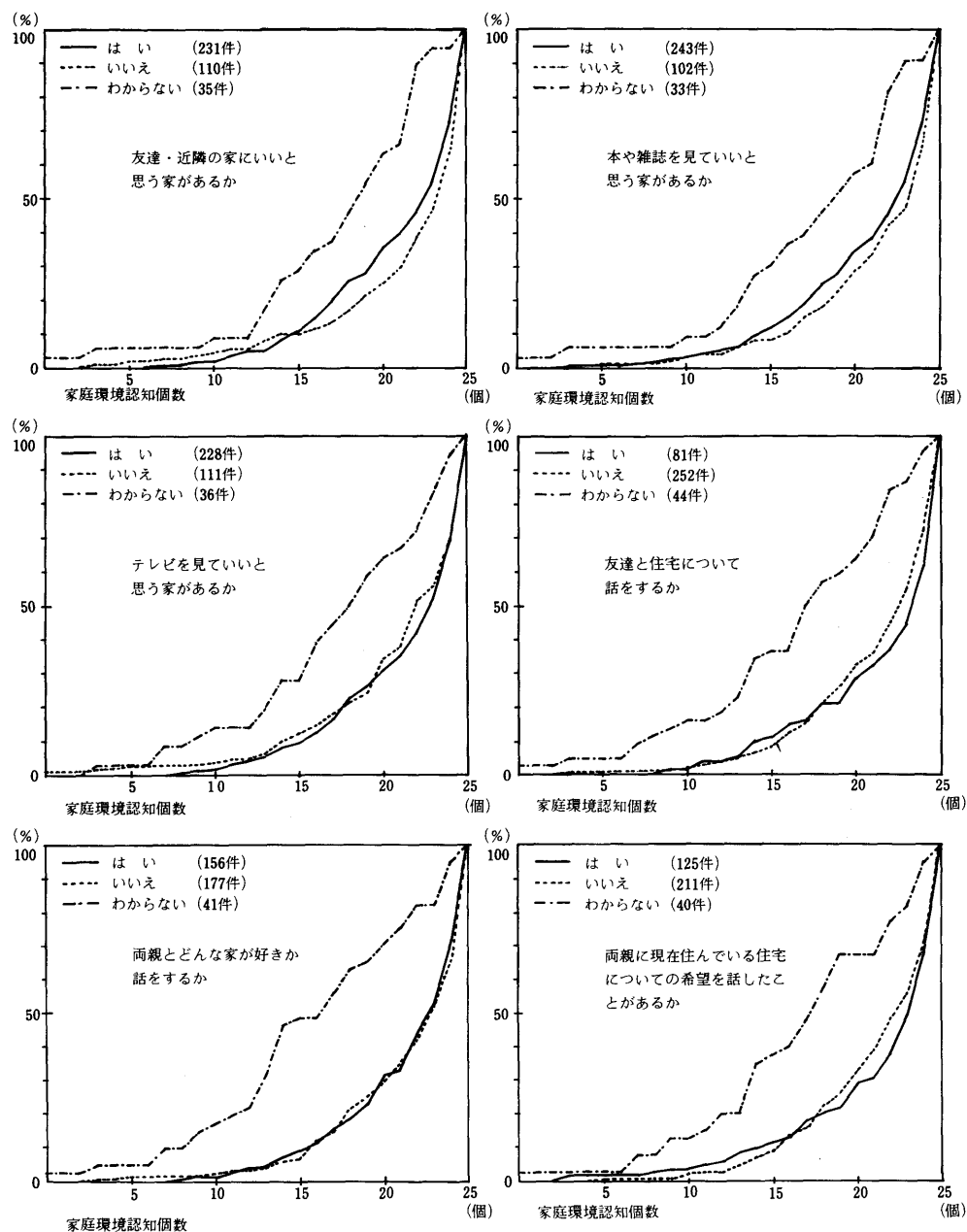


図7. 児童の住空間に対する興味・関心条件要因別家庭環境認知個数の累積度数分布

家庭環境」について有意差がみられ、いずれも男子の認知の方が進んでいる(表3、図3)。「学年」と「性別」要因によるこの傾向は、前節までにとらえた傾向を裏付けている。

次に、〈家族条件〉と家庭環境実態の認知個数との関連を検討する。「家族人数」では、「しきたりの環境」「空間の使い方」「両親の住空間に対する考え」と「全家庭環境」については、順位相関係数による

表3 影響要因別家庭環境認知平均個数（本人の条件、家族条件）

( ) 内の数字は件数

条件	要因	家庭環境		しきたりの環境	みせびらかしの環境	自律的環境	マイホーム主義的環境	住空間の実態	住空間の使い方	両親の生活	両親の住空間に対する考え	全家庭環境
		カテゴリー		(6項目)	(2項目)	(2項目)	(2項目)	(3項目)	(7項目)	(2項目)	(4項目)	(25項目)
本人の条件	学 年	3 年	4.92 (112)	1.38 (119)	1.68 (119)	1.43 (121)	2.37 (118)	5.97 (106)	1.58 (121)	2.96 (122)	20.64 (71)	
		4 年	4.89 (102)	1.38 (107)	1.66 (104)	1.43 (108)	2.37 (103)	5.93 (96)	1.50 (107)	2.85 (109)	20.12 (77)	
		5 年	5.18 (141)	1.41 (149)	1.75 (142)	1.59 (147)	2.39 (145)	6.28 (132)	1.60 (146)	3.12 (146)	21.25 (118)	
		6 年	5.44 (113)	1.35 (119)	1.76 (119)	1.53 (116)	2.52 (117)	6.40 (111)	1.59 (118)	3.37 (118)	22.08 (95)	
		検 定	(**)(**)					(*)(**)		(**)(**)(*)	(*)(*)(**)	
	性 別	男 子	5.14 (250)	1.39 (264)	1.77 (253)	1.57 (261)	2.45 (253)	6.24 (235)	1.64 (261)	3.16 (261)	21.54 (203)	
女 子		5.10 (218)	1.37 (230)	1.66 (231)	1.42 (231)	2.35 (230)	6.07 (210)	1.49 (231)	3.00 (234)	20.56 (178)		
家族条件	家 族 人 数	検 定			(*)(*)	(*)(**)(*)		(*)	(*)(**)(*)		(*)(**)	
		3 人	4.78 (55)	1.37 (59)	1.73 (60)	1.34 (58)	2.40 (55)	5.85 (54)	1.62 (60)	2.78 (59)	19.71 (42)	
		4 人	5.04 (181)	1.37 (189)	1.70 (186)	1.54 (191)	2.37 (186)	6.16 (174)	1.53 (187)	3.04 (188)	20.64 (150)	
		5 人	5.27 (122)	1.45 (131)	1.71 (126)	1.49 (131)	2.47 (129)	6.25 (114)	1.60 (130)	3.14 (132)	21.92 (98)	
		6 人 以 上	5.24 (80)	1.31 (81)	1.74 (81)	1.47 (79)	2.35 (80)	6.25 (75)	1.57 (82)	3.20 (82)	21.58 (64)	
	本 人 続 柄	検 定	(**)					(*)		(*)	(*)(**)	
		長 子	5.00 (228)	1.37 (241)	1.71 (238)	1.52 (241)	2.35 (234)	6.14 (222)	1.56 (241)	2.98 (243)	20.98 (187)	
		長 子 以 外	5.25 (204)	1.39 (214)	1.72 (209)	1.45 (212)	2.45 (211)	6.18 (189)	1.58 (212)	3.17 (212)	21.16 (162)	
	兄 弟 数	検 定	(*)(*)							(*)		
		1 人	4.78 (51)	1.38 (55)	1.73 (55)	1.43 (54)	2.35 (51)	5.90 (50)	1.56 (57)	2.82 (55)	19.90 (39)	
		2 人	5.09 (243)	1.38 (249)	1.73 (245)	1.53 (250)	2.40 (245)	6.21 (227)	1.58 (247)	3.07 (249)	20.95 (199)	
		3 人 以 上	5.26 (141)	1.38 (156)	1.69 (153)	1.45 (155)	2.42 (154)	6.16 (140)	1.55 (155)	3.14 (157)	21.62 (116)	
	家 族 型	検 定	(*)								(*)	
		核 家 族	5.09 (308)	1.37 (330)	1.71 (325)	1.50 (329)	2.41 (321)	6.15 (299)	1.55 (327)	3.04 (328)	20.9 (254)	
	拡 大 家 族	5.25 (108)	1.39 (109)	1.76 (107)	1.51 (107)	2.42 (108)	6.30 (99)	1.65 (110)	3.24 (110)	21.8 (87)		
	検 定											

\*\*は危険率1%で有意を示す ( )は平均値の差の検定における有意差

\*は危険率5%で有意を示す ( )は順位相関係数における有意性

< >は $\chi^2$ 検定における有意差

有意性がみられ、家族人数が多いほど児童の認知が進む傾向がみられる。本人の続柄では、「しきたりの環境」「両親の住空間に対する考え」について順位相関係数による有意性がみられ、いずれも長子以外の場合に認知が進んでいる。「兄弟数」と家庭環境実態認知との関連では、「しきたりの環境」と「全家庭環境」では、兄弟数の多い方が認知が進む傾向がみられる。しかし、「家族型」においては、認知に差はみられない(表3、図4)。すなわち、長子以外で兄弟

数、家族人数が多い児童の場合、「しきたりの環境」や「両親の住空間に対する考え」の側面の認知が進むといえよう。

<社会的階層条件>と家庭環境実態の認知個数との関連を検討する。まず、「父親の学歴」要因では、「みせびらかしの環境」と「全家庭環境」で順位相関係数に有意性があり、父親の学歴が高校・大学の場合に認知が進み中学の場合には遅れる傾向がみられる。「母親の学歴」要因と家庭環境実態認知個数の

表 4 影響要因別家庭環境認知平均個数

( ) 内の数字は件数

条件	家庭環境		しきたりの環境	みせびらかしの環境	自律的環境	マイホーム主義的環境	住空間の実態	住空間の使い方	両親の生活	両親の住空間に対する考え	全家庭環境
	要因	カテゴリー	(6項目)	(2項目)	(2項目)	(2項目)	(3項目)	(7項目)	(2項目)	(4項目)	(25項目)
社会的階層条件	父親の学歴	中学校卒	5.05 (132)	1.24 (136)	1.72 (138)	1.41 (138)	2.34 (138)	6.14 (125)	1.50 (138)	3.00 (135)	20.54(106)
		高校卒	5.22 (188)	1.47 (201)	1.75 (191)	1.59 (197)	2.46 (192)	6.25 (179)	1.65 (197)	3.22 (202)	21.65(156)
		短大卒	5.21 (81)	1.40 (88)	1.66 (89)	1.52 (86)	2.41 (85)	6.23 (82)	1.53 (87)	3.06 (86)	21.58(69)
		検定		(*)(**)(*)							(*)
	母親の学歴	中学校卒	4.86 (118)	1.25 (123)	1.68 (123)	1.35 (124)	2.24 (120)	5.89 (109)	1.47 (123)	2.84 (124)	19.69(93)
		高校卒	5.18 (236)	1.42 (250)	1.74 (243)	1.55 (246)	2.43 (244)	6.27 (227)	1.63 (247)	3.18 (250)	21.66(191)
		短大卒	5.43 (61)	1.51 (63)	1.70 (63)	1.59 (64)	2.68 (62)	6.31 (61)	1.53 (64)	3.19 (62)	21.87(53)
		検定	(**)(**)(*)	(*)(**)		(*)(**)	(**)(**)(*)	(*)(*)		(*)(**)	(**)(**)
住空間条件	住宅形式	一戸建	5.15 (356)	1.38 (375)	1.73 (368)	1.51 (375)	2.42 (368)	6.20 (342)	1.59 (372)	3.09 (375)	21.31(288)
		連続建	4.69 (26)	1.30 (27)	1.57 (28)	0.96 (27)	2.26 (27)	5.67 (27)	1.36 (28)	2.96 (28)	18.58(24)
		共同建	5.32 (28)	1.39 (28)	1.67 (27)	1.59 (29)	2.38 (26)	6.17 (24)	1.45 (29)	3.07 (29)	21.59(22)
		検定				(**)(*)(**)		(**)			(*)(*)
	部屋数	3室未満	5.00 (59)	1.38 (64)	1.63 (63)	1.39 (62)	2.24 (62)	5.84 (55)	1.44 (62)	2.83 (63)	19.94(49)
		4室	4.89 (63)	1.28 (65)	1.62 (63)	1.40 (67)	2.13 (63)	6.08 (61)	1.48 (65)	2.91 (66)	20.17(53)
		5室	5.15 (94)	1.38 (101)	1.73 (98)	1.46 (101)	2.56 (98)	6.21 (90)	1.57 (102)	3.03 (100)	21.10(78)
		6室	5.19 (64)	1.46 (67)	1.83 (66)	1.67 (66)	2.42 (66)	6.36 (61)	1.72 (65)	3.24 (67)	21.85(48)
		7室	4.93 (40)	1.25 (44)	1.62 (42)	1.45 (44)	2.33 (43)	5.89 (38)	1.42 (43)	2.95 (44)	20.87(30)
		8室以上	5.39 (94)	1.44 (94)	1.77 (95)	1.54 (94)	2.55 (93)	6.32 (91)	1.67 (96)	3.27 (95)	22.03(79)
		検定	(*)		(*)	(*)	(**)(**)(*)		(*)(*)(*)	(**)	(**)
	入居年度	昭和48年以前	5.24 (206)	1.42 (218)	1.72 (211)	1.50 (214)	2.47 (209)	6.16 (193)	1.58 (214)	3.11 (214)	21.27(159)
		昭和49～53年	4.89 (97)	1.20 (102)	1.68 (102)	1.38 (105)	2.21 (101)	5.96 (96)	1.47 (103)	2.92 (104)	20.15(81)
		昭和54～56年	4.97 (61)	1.40 (62)	1.74 (62)	1.56 (63)	2.32 (62)	6.29 (59)	1.59 (63)	3.00 (64)	20.77(52)
		昭和57・58年	5.37 (38)	1.64 (39)	1.80 (41)	1.61 (41)	2.63 (40)	6.57 (37)	1.67 (42)	3.27 (41)	23.25(32)
		検定	(*)	(*)	(**)	(*)	(*)	(**)	(*)		(*)
	所有関係	持家	5.17 (304)	1.40 (318)	1.72 (310)	1.50 (315)	2.43 (313)	6.19 (290)	1.58 (314)	3.09 (317)	21.31(244)
		借家	4.97 (107)	1.30 (113)	1.69 (113)	1.41 (116)	2.28 (109)	6.04 (104)	1.52 (116)	2.99 (115)	20.33(92)
		検定									

\*\*\*は危険率1%で有意を示す ( ) は平均値の差の検定における有意差

\* は危険率5%で有意を示す ( ) は順位相関係数における有意性

< > はχ<sup>2</sup>検定における有意差

関連では、「しきたりの環境」「みせびらかしの環境」「マイホーム主義的環境」「住空間の実態」「空間の使い方」「両親の住空間に対する考え」「全家庭環境」など多くの側面で、母親の学歴が高い場合に児童の認知は進んでおり、児童の家庭環境実態認知に対し

て、父親の学歴よりも母親の学歴の方が大きい影響を与えているといえる(表4、図5)。

<住空間条件>と家庭環境の実態に対する認知個数との関連を検討する。「住宅形式」では、「マイホーム主義的環境」と「全家庭環境」では平均値に、

表 5 影響要因別家庭環境認知平均個数

( ) 内の数字は件数

条件要因	カテゴリー	家庭環境		しきたり的環境	みせびらかし環境	自律的環境	マイホーム主義的環境	住空間の実態	住空間の使い方	両親の生活	両親の住空間に対する考え	全家庭環境
				(6項目)	(2項目)	(2項目)	(2項目)	(3項目)	(7項目)	(2項目)	(4項目)	(25項目)
児童	友だちや近所の家で「いいなあ」と思うものがありますか	は	い	5.14 (287)	1.41 (301)	1.75 (300)	1.52 (200)	2.42 (291)	6.23 (277)	1.58 (303)	3.07 (305)	21.25(231)
		い	い	5.31 (127)	1.49 (138)	1.74 (133)	1.61 (135)	2.25 (135)	6.27 (119)	1.65 (134)	3.31 (134)	21.70(110)
		わからない		4.39 (46)	0.83 (46)	1.37 (43)	1.02 (49)	1.98 (48)	5.31 (42)	1.24 (46)	2.45 (47)	17.77(35)
		検	定	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)
の住	本や雑誌を見て「いいなあ」と思う家がありますか	は	い	5.16 (299)	1.44 (312)	1.73 (306)	1.53 (312)	2.44 (304)	6.20 (284)	1.58 (309)	3.13 (311)	21.21(243)
		い	い	5.33 (123)	1.42 (135)	1.76 (132)	1.56 (135)	2.48 (132)	6.29 (117)	1.66 (137)	3.20 (137)	21.80(102)
		わからない		4.22 (41)	0.81 (42)	1.50 (42)	1.10 (41)	1.93 (42)	5.48 (40)	1.24 (41)	2.33 (42)	17.88(33)
		検	定	(**)	(**)	(*)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)
空間	テレビを見て「いいなあ」と思う家がありますか	は	い	5.18 (271)	1.42 (290)	1.73 (285)	1.58 (291)	2.45 (286)	6.29 (260)	1.60 (289)	3.10 (290)	21.55(228)
		い	い	5.25 (138)	1.41 (143)	1.72 (142)	1.47 (142)	2.43 (139)	6.12 (130)	1.60 (144)	3.24 (144)	21.12(111)
		わからない		4.35 (51)	1.08 (53)	1.58 (50)	1.08 (52)	2.06 (50)	5.50 (48)	1.31 (51)	2.49 (53)	17.72(36)
		検	定	(**)	(**)	(*)	(**)	(**)	(**)	(*)	(**)	(**)
に	友だちどうして、住宅について話をすることがありますか	は	い	5.25 (95)	1.54 (102)	1.81 (102)	1.62 (102)	2.59 (101)	6.34 (92)	1.68 (105)	3.21 (104)	21.88(81)
		い	い	5.23 (312)	1.41 (328)	1.72 (321)	1.56 (326)	2.45 (318)	6.25 (295)	1.59 (325)	3.15 (328)	21.53(252)
		わからない		4.22 (54)	0.93 (57)	1.49 (55)	0.93 (58)	1.82 (57)	5.29 (52)	1.24 (55)	2.43 (56)	16.95(44)
		検	定	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)
対	お父さんや、お母さんと、どんな家が好きだかという話をしたことがありますか	は	い	5.26 (186)	1.43 (196)	1.77 (197)	1.60 (196)	2.48 (192)	6.36 (180)	1.62 (200)	3.19 (199)	21.67(156)
		い	い	5.23 (220)	1.44 (233)	1.72 (224)	1.54 (230)	2.46 (229)	6.22 (205)	1.59 (227)	3.20 (230)	21.68(177)
		わからない		4.14 (51)	0.95 (55)	1.52 (54)	0.91 (56)	1.87 (52)	5.18 (50)	1.27 (55)	2.24 (55)	16.12(41)
		検	定	(**)	(**)	(*)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)
興	お父さんや、お母さんに今の住宅について、こうしてほしいとかいう希望などを話したことがありますか	は	い	5.27 (152)	1.44 (159)	1.74 (158)	1.64 (157)	2.49 (154)	6.31 (147)	1.59 (160)	3.28 (159)	21.58(125)
		い	い	5.21 (260)	1.43 (273)	1.74 (266)	1.50 (276)	2.44 (268)	6.21 (246)	1.60 (273)	3.12 (275)	21.47(211)
		わからない		4.08 (48)	0.92 (52)	1.50 (52)	1.00 (51)	1.98 (52)	5.33 (46)	1.27 (51)	2.23 (52)	17.13(40)
		検	定	(**)	(**)	(*)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)
関	家庭科の授業で「住まいと家族」の勉強をしたことで家に興味をもつようになりましたか	は	い	5.52 (66)	1.56 (71)	1.87 (71)	1.72 (72)	2.65 (69)	6.59 (66)	1.68 (72)	3.36 (72)	22.25(61)
		い	い	5.44 (102)	1.45 (107)	1.82 (102)	1.60 (104)	2.47 (107)	6.44 (96)	1.68 (103)	3.45 (104)	22.67(81)
		わからない		4.97 (78)	1.17 (82)	1.58 (81)	1.35 (80)	2.26 (78)	5.96 (74)	1.42 (81)	2.89 (80)	19.94(65)
		検	定	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(**)	(*)	(**)	(**)

\*\*は危険率1%で有意を示す ( ) は平均値の差の検定における有意差

\*は危険率5%で有意を示す ( ) は順位相関係数における有意性

< > は $\chi^2$ 検定における有意差

「空間の使い方」では $\chi^2$ 検定に有意差がみられ、連続建の場合より一戸建や共同建に居住している児童の認知の方が進んでいる。「住宅の部屋数」との関連では、「しきたり的環境」「自律的環境」「マイホーム

主義的環境」「住空間の実態」「両親の生活」「両親の住空間に対する考え」と「全家庭環境」において、順位相関係数に有意性があり、部屋数が4室以下の小住宅の場合には認知個数が少ない傾向がみられる。

また、現住宅への「入居年度」との関連では、「しきたりの環境」「みせびらかしの環境」「住空間の実態」と「全家庭環境」において、平均値に有意差がみられ、いずれも入居年度が2年前までの場合に、もっとも認知が進んでいるが、入居年度がもっとも早く居住年数が10年以上の場合がこれに次いでいる。しかし、「所有関係」が持家と借家の間には、実家庭環境実態認知個数に有意差はみられない(表4、図6)。すなわち、住宅が一戸建で広く空間の秩序づけがなされやすい場合や、空間が合理的に設計されている集合住宅の場合には家庭環境実態の認知が進み、入居年度が新しい場合や逆に居住年数が非常に長い場合にも住空間の実態や空間の使い方に対する認知が進むといえよう。

最後に、＜児童の住空間に対する興味・関心＞と児童の家庭環境実態に対する認知との関連を検討する。表4に示す7つの質問項目について、「はい」「いいえ」「わからない」のカテゴリーの回答方式とした。このうち「わからない」と答えた者は、住宅の理想像や要求などが明確でない状態であると考えられる。7側面からとらえた児童の住宅に対する興味・関心度について、それが積極的な場合も消極的な場合も家庭環境実態認知に対して差はなく、むしろ住宅の理想像や要求が明確でなく住空間についてほとんど意識化していないと考えられる場合(「わからない」と答えた児童)に、著るしく認知が遅れている(表5、図7)。

## 4. 結 語

小学校児童3年生～6年生を対象として、家庭環境の実態に対する認知について、学年による認知の発達状況、性別による認知の相異について検討し、さらにその認知の構造と、認知に影響を与える要因と認知との関連について検討した。その結果得られた知見を次に述べる。

1) すべての家庭環境について約70%以上の認知がなされていた。そのうち、認知率が相対的に低いのは、接客室や接客行為に関する側面や家族全体の生活や両親の生活および両親の住宅に対する考え方などで、これらは直接児童本人と関係を持たない部分あるいは関連の薄い事柄である。

2) 家庭環境の実態に対する認知を性別にみると家庭環境の諸側面のほとんどの項目において男子の認知率の方が高い傾向がみられた。

3) 学年が上昇すると家庭環境実態の認知が進むの

は、「しきたりの環境」や接客に関する側面および＜空間の使い方＞に関する側面であった。「しきたりの環境」のうち、＜両親の住宅に対する考え＞(「①土地・家の継承」「②家相・占い」)の項目は、相対的に認知率が低い項目であるが、3年生～6年生まで順次認知率が上昇しており、この年齢段階で認知が進むと考えられる。しかし、非日常的生活の側面を示す＜みせびらかしの環境＞(「⑦接客室優先」「⑧冠婚葬祭盛大」)は、対象全体の認知率が70%を越えないもっとも認知率の低い項目であるが、これらは、学年が上昇しても認知率の上昇はみられず、さらに後の年齢段階まで認知は進まない項目といえる。

4) 児童の家庭環境の実態に対する認知の構造をとらえるため、因子分析を行なったが、その結果第6因子までを抽出した。第1因子は本人との関連の薄い環境因子、第2因子は住宅の整理・整頓と居住地域環境因子、第3因子は空間の使い方の秩序化に関する因子、第4因子は住空間および生活の実態に関する因子、第5因子は空間の使い方の差別化に関する因子、第6因子は両親の住宅に対する無関心因子であった。

5) 家庭環境の実態に対する認知個数とその影響要因との関連を検討した結果、＜児童本人の条件＞において、「学年」では3・4年生では認知に差はなく5年生、6年生と順次上昇する傾向がみられ、「性別」では空間、生活の多側面において男子の認知の方が上回っていることが明きらかになった。＜家族の条件＞では、「家族人数」が多く、「兄弟数」も多い長子以外の児童で認知が進む傾向がとらえられた。＜社会的階層条件＞では、父母の学歴が高い場合に認知が進んでいるが、特に「母親の学歴」との関係が強いことが明きらかになった。＜住空間条件＞では、「住宅形式」、「部屋数」、「入居年度」による影響がとらえられ、＜児童の住宅に対する興味・関心条件＞では、いずれも児童本人がもつ住宅の理想像や要求が意識化されていない場合に、著るしく認知が遅れていることが明きらかになった。

(注)

- 1) 中島喜代子：住居観に関する研究（その1～5）、三重大学教育学部研究紀要、第34巻～36巻、1983～1985年
- 2) 住居観型は、「ねぐら型」「しきたり型」「みせびらかし型」「うちでも型」「あたらしがり型」「マイホーム主義型」「合理型」「自律型」「社会性重視型」に分類できるが<sup>（注）</sup>詳しくは、注1)の文献に述べている。
- 3) 新堀祐子、畠山歌子：児童・生徒の住意識、生活文化研究第22冊、1979年
- 4) 因子分析の因子抽出法は、共通性の反復推定の主因子解を用い、因子の回転はバリマックス回転を用いた。